

「迂言」小考

——その学制を中心として——

前野喜代治

目次

一 「迂言」の成立	一頁
二 第一篇「国本」の梗概	三頁
三 第二篇「君道」の梗概	五頁
四 第五篇「学制」の梗概	六頁
(一)はじめに	
(二)学校設置の必要	
(三)学校の方針	
(四)学校の組織	
(五)稽古の次第	
(六)稽古の情況と試験	
(七)訓育	
(八)まとめ	
五 「迂言」批判	一一頁
(一)「迂言」の位置	
(二)学校観	
(三)学校の組織について	
(四)稽古の次第について	
(五)むすび	

参考文献

二〇頁

一 「迂言」の成立

迂言は、広瀬淡窓五十九歳（天保十三年＝一八四一＝八月六日脱稿）の時の作である。この作品は、肥前大村侯の依頼を受けて、侯国（藩）の政治・経済・教育の在り方を論じたものである。当時の日記（懷旧樓筆記）に曰う「二巻凡九十葉（現今四百字詰原稿用紙約百三十枚分）真片仮名ヲ以テ綴レリ。起草ヨリ二旬余ニシテ成レリ。儒者ノ経国ニ於ケル誠ニ屠龍ノ技ナリ、然レドモ政談草茅危言ノ類、ママ其説アゲ行ハルルコトアリ。此篇モ万一知己ニ逢ヒ採用アラシニハ本懐ノ至ナリ」と。依つて所説に自信の程が窺われる。

一方、同書巻頭に「題迂言首」として次の文章が見られる。

迂言六篇不_レ載_二撰者姓名_一。於_二人家所_レ藏_二故紙中_一得_レ之。書言_二經濟之說_一。專主_二列國_一不_レ及_二天下_一。蓋成_二於侯国微臣之手_一以_二身不_レ在_二其位_一不_レ敢自顯_二也_一。其指_二斥近時病弊_一多中_二事情_一。至_レ論_二施設之方_一則有_レ可_レ行焉有_レ不_レ可_レ行焉。以_レ迂為_レ名可_レ謂_二善_二於自處_一矣。編次錯乱又有_二散失_一。頗加_二修理_一命_二侍史_一謄_レ之以為_二帳中之秘_一。觀_レ有_二昇平二百之語_一則其人距_レ今未_レ遠或存在_レ世。恨不_二一見_一之以尽_二其蘊_一也。

これによると、「迂言」は淡窓の創案としていない。或る家が売物となりその際故紙の中からこれを発見したという形にし、撰者は不明であるが、蓋し侯国微臣の手になるものであろうとして、淡窓の所見であることを差し控えている。鋭く時弊を痛論しているからその反響を考慮したものと思われる。ところが大村侯に嘉納され、諸侯間にも喧伝されたので、脱稿後十五年、安政二年（淡窓七十四歳）に至つて刻に附した。当時の淡窓日記に「後年ニ至リ往々諸侯ノ覽ニ入ルコトアリ。肥ノ大村侯、予ノ大津侯皆之ヲ読ミ玉ヘリ。又今ノ白河侯ハ大村侯ノ弟ナリ。其ノ臣ノ話ニ侯此ノ書ヲ以テ仙石侯ニ送り玉ヘリ。伝言アリケルハ、此後此書ノ旨ニ因リ玉ハバ先年ノ如キ乱ハ生ズマジトナリ。其

ノ臣ヨリ謙吉（淡窓の末弟）ニ其ノ事語レリ」と見える。当初淡窓の危惧にも拘らず、相当の程度に流布し、諸侯の間に好評を得たことが窺われる。

二 第一篇「国本」の梗概

「迂言」は、国本・君道・禄位・兵農・学制・雑論の六篇から成る。また別に「迂言附録」があつて、総論・三戸・名器・医師・社倉の五篇を以て「迂言」の所説を補足している。本稿で主として考察しようとするものは第五篇「学制」についてであるが、その前提として他の諸篇についても概観しなければならない。所説の批判は、すべて後の問題とし、一応第一篇からその梗概を鳥瞰しよう。

第一篇「国本」の冒頭に曰う「東照神祖関原ノ一戦ニ四海ノ乱ヲ平ゲ玉ヒシヨリ今ニ至ルマデ二百三十余年。天下安然トシテ干戈ノ事ヲシラズ君臣上下其ノ分ニ安シゼリ」と筆を起した。然り当世は表は泰平であるが、その実「諸侯ノ国貧窮極メテ甚シク上ハ国君ヨリシテ下ハ士大夫庶民ニ及ブマデ戚々トシテ憂懼シ身ノ置キ所ナキガ如シ」である。だとすればその貧窮の原因は何か。直接原因は「大平久シキニ及ンデハ安佚ニ耽リテ奢侈ヲ生ジ」たことにある。だが、より根本的には風俗の偏陋廃類に因る。風俗こそは国の本である。「国ノ盛衰興亡ハ皆風俗ノ善悪ニヨル」のであるが、大平の久しき弊俗が横流している。その弊俗の主たるもの六種ある。この六弊の矯正こそが政治の根本であり。教育の方針も亦この六弊の洗脱にある、とする。それなら所謂六弊とは何か。その要旨は次の通りである。

第一「国君ヨリ群臣ニ至ルマデ其行儀尊倨高大ニ過ギタリ」——今の諸大名は帝王も及ばぬように尊大な行儀をする、群臣亦これに倣う。かくて君臣間に和親もなく、上の命も行われ難い。今諸国において儉約をすすめる奢侈を戒しめつつあるが、元来奢侈の源は尊倨から起るものである。尊倨の態を改めなくては如何程節約を令しても、水を加え

て薪を添えるようなもので結證局なきことである。

第二「誇張矜伐ヲ努ムルコトナリ」——今時の諸侯は一寸の外出にも数百人を引き具し戦場にでも行くような姿である。これは誇張のためである。江戸においても参観の道中においても無益な金銀の浪費が夥しい。これは全く誇張のためであつて、侯国の困窮はここから起る。このような誇張矜伐の態を改めることが極めて肝要である。

第三「諸事秘密閉固スルコト也」——秘閉は誇張と相反しているがその病根は一つである。誇張はなきものがあるように見せ、秘閉はあるものをなきようにとりなす。その偽を飾る点においては同一である。秘閉の風俗を改めなければ、君臣上下の間が隔り、その内に姦計を図る者が出てくるであらう。

第四「門地ノ上下ヲ論ズルコトナリ」——元來、門地を論ずるのは、祖先の美を挙げて子孫たる者に先祖を辱めないように出精せしめるためであつた。然るに現在、門地高ければ不才不徳も恥づる所なく、門地卑ければ才徳芸能があつても貴ぶに足らずという風態になっている。このことは実に国の大害である。この弊風を去らなければ有能者の進む途はない。

第五「先格ニ因循スルコトナリ」——先例、先格と言っても千思万慮を加えて立てたものばかりではない。にも拘らず、今時は先例、先格に因循し過ぎてゐる。この固陋な弊習を改め義理当然を以て事を処するようになさなければ、すべてものの進歩は望まれない。

第六「文盲不学ナルコトナリ」——上述の五弊は文盲不学より起る。若し国の患を慮り衰を変じて盛となし、危を変じて安きとなさんと欲せば、古今を知り物理に達しなければならぬ。所謂名君はすべて好学の人である。大名や家老ばかりでなく、普く領内の者に学を好むような風教を施すべきである。

以上の六弊は、諸侯国共通の病根を指摘したものである。或る一部の大名や特殊の侯国に限る時弊は他に多くを数

えることができよう。この六弊こそは諸侯国一徹であつて、この風習の裡に成長した者は何れもこの弊から離脱し得ないでいる。だが、今にしてこの習弊を改更しなければ、如何様に経済制度の末端を改めて見ても、所詮永久に君臣安堵の時はあり得ない。と言つても、二百余年の積弊は一朝にして改善できるものではない。それは明君英主の下、正しい教育の制度を立て、確實にその運営をなすことによつてのみ、徐々に時弊も改更することができるのである。

三 第二篇「君道」の梗概

第二篇「君道」においては、一藩の主たる者の守るべき道を説いている。その冒頭に言う。

「君ハ国ノ本ナリ。君正シケレバ正シカラザルモノナキハ古今ノ常理ニテ五尺ノ童子モ知ルコトナレバ此ニ詳ニセズ。因ツテ前ニ論ゼシ六弊ノコト、先ツ君ヨリ之ヲ改メテ臣下ニ及シ玉フベキナリ。就中尊倨秘閉ノ兩条、最初ニ之ヲ改ムニ非レバ一切ノ美政取行ヒ難シ。」と。

この見地から、大名はその外出の際の儀衛の簡素化に努めること、屢々領内を巡視してその地形地勢と住民の様相を正しく認識すべきこと、参覲の道中における経費の節減と在府生活の改善を図るべきこと、藩主たるものの真の恥——重税・百姓逃散・士大夫武備不足・有能臣下の不活用等——を知ること、信賞必罰の励行等々に就いて詳細に論及している。また、真の勇者とは「唯義ニ於テスベキ程ノコトヲスル者、」と定義し、その上は「天命ナレバ心遣無用」と断じ、「是ノ如ク安心決定シタレ処ヨリ矢石ノ中ニ在ッテモ恐ルルコトナク、又高貴権勢ノ人ニ対シテモ屈スルコトナシ」と説く。

特に注目すべきは、幼君教育の必要を主張し、その方法を説いていることである。「君徳ヲ正シクセント欲セバ世子タル時ヨリ心ヲ用フベシ」との見地から、「学制」篇にも世子（幼君）の学校教育に就て論じているが、ここでは古

来の師・傳・保の制を復活し以て世子教導の万全を期すべきであると主張する。即ち。

「世子五歳マデハ婦人ノ手ニ長ジ玉ヘドモ、六歳ニ至ラバ男子正シキ人柄ノ者ヲ択ビ、其側ニ差シ添ヘ、起居周旋ニ心ヲ就ケ、行儀正シク成長シ玉フ様ニスベシ。是即チ保ナリ。十二歳ニ至リ授読既ニ終リ講読ヲ聴キ玉フ所ニ至レバ、然ルベキ儒者ヲ差シ添ヘ、經史ノ義理・古今ノ事變ヲ説カシメ、身ヲ修ムルヨリ國ヲ治ムルニ至ル迄ノ方法ヲ知リ玉フ様ニスベシ、其ノ任ニ当ル者即傳ナリ。十七・八ニ及バセラレ、追々國政ヲナシ玉フ時ニ至レバ、家老中老ナド太身ノ内ヨリ威望德器アル人ヲ択ンデ之ニ師トシテ事ヘ、一切ノ行事・政務ノ処置皆問ヒ謀リテ其ノ教ヲ受ケ玉フベシ是即チ師ナリ」と。

保・傳・師の三者は、幼君襲封後も協力して輔佐すべきである。若し主君に諫言するを要する場合は、事の大小輕重に従い、保・傳・師の三者の内から然るべき者が其の責に當る。三者中最も師を重んじ、内庭ではこれを上座に置く。其の如く君侯が率先して敬師の範を示すことを社会秩序を確立する基調である、と説く。

(なお、迂言第三篇に「禄位」のこと、第四篇に「兵農」のことに關し所見を開陳している。これらは、本稿の主目標(学制の検討)に關連が薄いから、ここではすべて省略する)。

四 第五篇「学制」の梗概

(一) はじめに

「迂言」六篇及びその附録をも含めて、淡窓の最も力を注いだ部分は第五篇「学制」であつた。ここでは、先づ「迂言」学制の原文の前後順序を整頓し、その重複を整理し、直接に必要としない例話を削除し、新たに若干の項目を

設定して淡窓の所説の要領を解説しよう。各項目内容の批判・卑見等は一括して最後の「迂言批判」の項に譲り、ここではできるだけ忠実にかつ簡明に淡窓の主張を要述することにする。

(二) 学校設置の必要

淡窓によれば「人材ヲ教育スルコト今時諸侯ノ国ニ於テ第一ノ要務」であるとする。何故か。けだし「賢ヲ進メ不肖ヲ退クルハ国ヲ治ムルノ本ニシテ、賢者用ヒラルレバ国興リ、不肖者用ヒラルレバ国亡ブコト古今ノ道理、人ノ偏ク知ル所」であるからである。然るに封建の世、士大夫たるもの皆其の禄を世々にする習であるから、世禄の家に生れたものは不肖でも簡単に退けることはむづかしい。又下にある賢者を挙げようとしても上の賦禄に限りがあるから世禄の外に新家を増すことは容易でない。だから旧家の子弟を教育して善に赴き悪を棄てしめて侯国の用に供する外はない。学校設置の必要はここにある。

易に「童牛之レ牯ス」とある。未だ角の生じない内に牯をはめておかなければならいと同様に、人の教育も幼少の間から始めなければならない。幼少の時から正しい教育を加えてこそ、二百年來の積弊たる六弊も、無理なく自然の裡に改善することができる。

(三) 学校方針

学校では差別を設けてはならない。国君の嫡子も学校に入り臣下と同一の学業に努めしめる。尊卑の差別をせず群臣諸民の子弟と打ち混じ、唯年齢の長幼によって上下の座を設ける。現今は仮令学校の設があつても、世子・諸公子は入学せず、家中の子弟は入学しても家格によって座を設け、学業と長幼とを論じない。これ根本において誤である。また稽古内容も素読・訓詁のみで有用の学は努めていない。今後の学校は「長幼ノ序ヲ正シ稽古ノ筋モ無用ヲ去ツテ有用ニ就キ、而後ニ賞罰黜陟ヲ其ノ間ニ加ヘバ、風習大ニ改リ、久シキヲ待タズシテ一国ノ人材斐然トシテ大禄世

家二戸位素餐ノ者ナク、下ニアル賢才モ相応ニ進路ヲ得、且従前ノ弊俗一洗スルに相違ない。

(四) 学校の組織

学校に文武両学を置く、その文学部には経学・史学・諸子学・文章学・兵学・医学・天文学・和学・職原学・蘭学・書学・数学・諸礼学の科を置く。武学部には剣術・槍術・弓術・馬術・砲術・柔術の科を置き、その校舎は文学部と一丁余の距離を距ててこれを設ける。

文武両学の総帥のため、大身の中より選んで奉行一名を置く。奉行は生員（生徒）の学業・性行・家庭事情を精査記帳して課程の進級、卒業の資とする。また後日生員が家督を相続し或は養子縁組等の場合に其の人物証明の責に当る。

教官は生員の学業の指導に当る。教官は各その長ずる所により各科一名を原則とするが、二三の教科を兼ね教える場合もある。総じて教官の研究は共通的な問題の広さよりも専門的な課題の深さを尚ぶ。

生員は世子・諸公子・家老より歩卒の子弟に至るまで十歳より二十四歳までの部屋栖者はすべて入学するを原則とする。十歳に達すると父兄同伴で奉行に接見しその支配下に入る。以後在学中は勿論のこと、学を卒えた後も奉行に隸属し、家督を相続して始めてその支配下を脱する。

(五) 稽古の次第

文学生稽古の階梯に素読・輪読・輪講・文章の四段があり、各上中下の三等の別がある。入学当初即ち素読下等の生員は、先ず四書の素読を授けられ、その傍らに手跡・諸礼及び平易な数術を学ぶ。五経・小学・近思録等の素読終り誦読滞ることないようになれば輪読生に進む。輪読生は左伝・史記等の未授書を輪次を以て読ましめ、音声朗暢で句読に誤の無い者は輪読上等生であつて輪講生に進む。ここでは経史の類を列座して輪次に講じ、言語明白で義理に通

達すれば輪講上等生である。彼等は進んで文章生となる。文章生には教官から出題（例えば訴訟の判断、隣国との掛合い下方への告諭等）し、和文を以て所見を記述せしめる。その文の道理が至極で行文整頓し人をして感服せしめるようになって文章上等生と言える。

右の素読生から文章生までの稽古は、十一・二歳から学び始め、速かな者は五・六年、晚い者も大抵二十歳以内で修学成就するを通例とする。尤も文章生にまで進むのは士分以上の子弟であつて、歩卒の子弟等格別才気のない者は身分相應の階梯で学校を去つてよい。

丙 稽古の情況と試験

素読を授ける者は輪読生或は輪講生であり、輪読を監する者は輪講生または文章生これに当る。輪講生を監し文章生の指導をなすのが教官の任務である。但し世子・諸公子・家老の子弟は、奉行の許可を得て、素読時代に限り、私宅教師に就て学習することが認められる。この場合にも日を定めて出校することが要求され、試験による進級は他の一般生員と同様であり、校内には学業上の所属階梯の名札が連ねられるのである。

試験は随時その学習領域について行われる。月一度は君侯も臨校し、輪講・文章の上等生はその眼前で試験される（御前試業）。そして優秀生は賞詞、賞品を賜ふこともある。君侯が試験に臨校する所以は、単に生員の学業を奨励しその進度を検するだけではない。より重要な意義は、将来藩政に参与し得る要員の発掘にある、君侯は平素から奉行を通して上級生の人物について聴取しており、臨校の際これを實地に検証し、以て後年これを登庸する際の参考に資せんとするのである。

古来、人物採用の場合の選考規準として身（健否大小等）、書（文字の巧拙、学問・識見の深淺）、判（判断の適否）、言（言論の明否）の四つが挙げられる。また成徳者の条件として徳行の篤いこと、言語の明晰なこと、政治の才能の

あること、文章に長けていることの四つが挙げられている。学校の生員は未だ修学中とはいえ、輪講・文章の上等生の中には、これらの規準に照して将来の藩政担当の候補者を発見しておこうとするのであった。

(七) 訓 育

生員登校すると小玄関から入り、所定の坐席に就く。(大門即ち正面の大玄関は君侯・奉行・教官だけが出入する) 生員の座席は文章・輪講・輪読・素読各居室を別にし、各室内では年長者が上席となる。公子とても、許されて自宅素読の期を卒えると、学校に通学しなければならないが、その際従者は二人に限る。学校に到着すると従者は門外の長屋に休息せしめ、公子単独で小玄関から入り、学業相応の居室に着坐する。学業はすべて平等の立場で厳格に行われ身分地位上の考慮をしてはならない。

生員の服色は、公子は黒色、大身の子弟で已にお目見えのすんだものは黄色、その他は青色とする。依って学業は同列であっても、身分上の上下は明らかである。だから行動上では身分秩序が厳として守らねばならない。但し生員の賞罰黜陟は公平でなければならない。(身分によって服色を異にし位階秩序を確保すべきことは、第三篇「禄位」の章で詳細に論じている。生員にもこれを準用したのである。)

(八) ま と め

以上の如く学制を正すことによって、人材は育成され、積年の大弊は自然の裡に改善することができる。公子・大身者の子弟も歩卒のそれと学業上同席し、ただ年齢の長幼を以て相譲るのであるから、尊倨の態度は自然に改めることができる。公子とてもその通学に従者二人に限るのであるから、誇張の弊を除去することができる。すべて公衆の面前で公正に処するのであるから、秘閉の風も除かれ、学業の高下で居室を別にするのであるから、門地の論は無用となり、書を学んで古今に通じ理義当然を教えられるのであるから、文盲と先格因循の弊は二つながら除き得ること

になる。

また公子と門地低いものと同列して学習するのであるから、相互に氣脈相通じる。依って公子成長し君侯となっても下情に通じ領民とも親和し得る。生員相互間の学業と人物の優劣も自然のうちに知り得ているのであるから、公子襲封後に賢者を登庸し才能相應の進路を開かしめるにも大過なきを得るであろう。一般の家督相続にも養子縁組にも、奉行の人物証明と教官の学業証明の奥判を要する定であるから、もし長子凡庸で次男優秀の場合には、長子は除かれ次男が家督を相続することになる。かくなつてはじめて一藩の興隆も家門永遠の繁栄も期待することができる。すべてこれ学校の制を立て正しくこれを運営することに基因するものである。

五 「迂言」批判

(一)「迂言」の位置

以上「迂言」の内容を鳥瞰して来た（但し第三「禄位」、第四「兵農」及び第六「雑論」を省く）。進んでその学制を中心として若干の卑見を開陳しよう。その前に先ずこの書の位置について考察しなければならない。

淡窓七十余年の生涯には数多くの著作がある。左に淡窓全集を所依としてその一覧を示さう。

淡窓関係著作一覧

種別	書名	巻数	著者の年齢時
同註疏	読論語	一	筆林外録の
同	一	同	筆林外録の
種別	書名	巻数	著者の年齢時
同註疏	老子孟子	一	筆林外録の
同	老子註解	二	筆林外録の
同	一	二	筆林外録の

同	同	同	同	同	雜	同	同	同	日	同	同	詩	同	語	同	同	同	述
書	万善簿(義欲)	いろは歌	申聞書	勸俟約説	迂言附録	甲寅新曆	進修録	欽齊日記	淡窓日記	淡窓詩話	第二遠思樓詩抄	淡窓小品	再新録	夜雨寮筆記	性善論	約言或問	約言	析義
簡																		玄
九	六	一	一	一	一	五	一四	六	一九	二	二	二	一	四	一	一	一	一
	至自 七五一四	門人筆記 四九		刊七 四行	至自 七五三	至自 六六〇	至自 四四九	至自 四四一	年明 治十六	刊八 行六			筆門 人記の				四七	五七
同	同	同	同	同	同	雜	同	同	日	自叙伝	同	詩	同	同	語	同	同	述
関係文書	万善簿(敬怠)	儒林評	発願文	規約告諭	論語三言解	迂言	再修録	醒齊日記	遠思樓日記	懷旧樓筆記	文稿拾遺	遠思樓詩抄	六橋記聞	自新録	醒齊語録	約言或問(文)	約言	義府
二三	四	一	一	一	一	二	一二	二〇	六	五六	一	二	一〇	二	二	一	一	一
	至自 七五一七		五五	二二	六一	七三	至自 七六二	至自 五五九	至自 四四二	至自 六四四			の林 編外 集等	の林 筆外 記等		五〇		六〇

同	同
家	家
礼	礼
譜	譜
一	二
同	同
略	略
系	系
函	函
一	一

上表は淡窓全集全三巻に登載されたものであるが、これ以外に中島市三郎著「教聖広瀬淡窓の研究」には学則・月旦・覚書・手簡類が追加されている。

さて、右多数の著述の脱稿若しくは発表された年齢を点検すると、迂言(五十九歳)以後のものとしては、日記類を別とすれば義府(六十歳)、第二遠思楼詩抄(七十四歳)、論語三言解(七十三歳)、規約告論(六十一歳)等数種あるに過ぎない。しかも第二遠思楼詩抄はこの年、刻に附したに過ぎず、遙か以前の作の撰録である。規約告論も、その類九種をこの年に集録したと言うだけである。論語三言解は府内侯の需に応じて辺防策を説いたものである。唯一つ義府は易を研究し天地人物・鬼神幽明の理・古今治乱について所見を述べたもので、学問的意義のある労作と見られる。

このように観てくると、「迂言」こそは、淡窓の学と業との円熟期の作品と考えられる。しかも単なる語録や隨筆の類ではなく、大村侯に呈する文書として、最も慎重に細心の留意を払いながら卒直に、六十年にわたる経国策研鑽のエッセンスを表現したものと考えられる。ここに此の書の高い位置と重要さとを確認しなければならない。それだけに淡窓自らこの著作の社会的反響に敏感たらざるを得なかった。巻頭の「題迂言首」が雄弁にこのことを物語る。

(本稿一・迂言の成立の項参照)。

淡窓は文政十一年(四十七歳)に「約言」(漢文)一卷を著した。淡窓の信条たる敬天説を詳述したものである。越えて天保二年(五十歳)「約言或問」を著し、国文で問答体を以て先の「約言」の義を解説した。これらは遂に公刊しなかった。と言うのは、林子平の「海防論」の災禍を知り、最も敬虔な態度で天を拝し易を立て卦の啓示を聞いた

ところ、甚だ否なるを知って、遂に「約言」を刻に附することを思い止めたのであった。(中島市三郎著教聖広瀬淡窓の研究二二五頁)。「迂言」は内容的に見て「約言」よりも一段と鋭く時弊を論じその対策を論攻しているものであるから、淡窓自身の著の形を避け、況んや直ちに刊行することはしなかったのである。(尤も脱稿後十五年安政二年(七十四歳)に至って公刊したこと前述の通りである。)

淡窓のこのような態度を「慎重な学究」と称揚するか、「憶病な腐儒」と冷笑するか、「保身に汲々たる俗儒」と蔑視するか、或は自分の主張を權威付けるため先哲の説の如く見せかける「銜学の徒」と評すべきか、何れにせよ、当時の政治的・社会的構造と言論の自由でなかった時点进行を思う時、「迂言」だけの主張でも大きな勇気を要したであろうことは諒解しなければならないであろう。このことは翻して言てば、淡窓の学殖と識見とを傾倒し、心血を注いだ力作だから、その反響に深甚な注意を払ったのである。「醒斎語録」卷二に見られる「対大村侯問」(読書・修養・政治に関する対問数篇、林外の筆記に係る)などよりも、一層具体的にかつ大胆率直に経国策の根本を論攻したものとして、「迂言」の位置と意義とを高く評価したいと私は思う。

(二) 学 校 観

第一篇「国本」において、その八割のスペースを与えて力説した所謂六弊は、藩政の爛熟期という時点においては概ね妥当な批判であると思う。泰平二百余年の間に積み成せる習俗として、その弊の至れるものを抉出し、その是正を叫ぶことは極めて進歩的の識見と言わねばならない。第二篇の「君道」には国侯が卒先して六弊打破を励行すべきことを力説する。それには国侯自ら学問に励むべきであり、より根本的には世子(幼君)の教育に留意しなければならぬとして、保・傳・師の責務を諄々として説示する。何れもこれ六弊打破の信念に燃えての主張、如何にも信念堅固な老儒の風貌を窺得するに十分である。

淡窓によれば、学校の設置は、その教育・訓練を通して自然の裡に六弊から洗脱せしめ、依て以て将来国用に役立ち得る人材の育成を目的としている。「今時封建ノ制、不肖ナリトテニワカニ退ケ難シ（中略）、旧家ノ子弟ヲ教育シテ善ニ趣キ惡ヲ棄テシメ国用ニ供スルヨリ外ナシ（中略）。学校ヲ設ケテ家中ノ子弟ヲ其ノ中ニ遊バシメ、幼少ヨリ見聞スル所、一切世俗ノ流弊ト異ナルコトノミナレバ、自然ト其ノ中ニ化シテ六弊モ改ムルトモナク止ムベキナリ」（第五学制篇冒頭の一節）。

まこと、淡窓における理想の学校は、稽古の實際も訓育の規律も六弊打破の基調からすべて律せられ、それを通して将来藩政担当のすぐれた候補者を養成することにあつた。だから、学校は、未だ近代精神に立脚した人間育成の場と言えなかつた。学校をして人間の自由と平等とが尊重され、個人の人間性開発のための機関たらしめるところまでには達していなかつた。尊倡・誇張・秘閉・門地・先格を打破せよと痛論するあたり、当時として頗る革新的識見として高くこれを認めなければならぬが、「個人の教育権の主張」といった近代思想までも淡窓に求めることは無理であつたと見ねばなるまい。

（三）学校の組織について

上述の学校観から、その組織が考えられ、その稽古の次第も考查の方法も定められる。それらは淡窓自ら経営した咸宜園の組織や学習法を基礎にした考え方が多く見られる。だがここに謂う学校は、私人の経営する私塾ではない。藩侯の主宰する藩学であることを銘記せねばならない。この立場から、文武両部を設けたこと、その教科内容の充実している点は一応認める。文学部に経学・史学・諸子学・文章学・書学等の諸科を置くことは、当時一般の漢学中心の藩学に多く見るところである。が更に数学・天門学の外に蘭学科をも加えている。数学・天門学は我が津輕藩学稽古館においても寛政八年（一七九六）の創設当初から設置されていたが、蘭学の開講は安政六年（一八五九）に至って

佐々木元俊教授を得て漸く始った。(詳しくは拙著「青森県教育史上卷三〇〇頁」)。だから淡窓の主張は稽古館蘭学科の設置よりも更に十八年以前であつたことを注目しておきたい。尤も弘前人桐山正哲や前野長沢・杉田玄白等によって「解体新書」の出現したのは安永三年(一七七四)のことである。その後半世紀余も経てからの淡窓の主張は当然のことであり、西国諸藩が蘭学に留意していたことは奇とするに当らない。つまり我が津輕藩が洋学撰取に著しく立ち後れていた事実を卒直に認めねばならない。

それは兎も角として、淡窓の主張する学校には和学、職原学、諸礼学等の諸科も置かれていたことに留意したい。ここは単なる漢学塾ではなく、洋学・和学をも兼習する学校で当時の学問諸領域を網羅する綜合学府であつたのである。惜しむらくは自然科学に関する諸科の殆んど見られないことである(医学は設置)。だがこれは、当時の斯学の未発達とこの学校の設置目的から見て止むを得ないことと思わねばならない。

一方、武学部には劍・槍・弓・馬・砲・柔の各術科を設けた。若しそれ、加ふるに戰略・戰術及び水泳術を加えたとすれば、およそ当時としては完璧に近い武学部成立を見たであらう。

問題は、文武両学部を通じて、各科の優れた教官を得られたか否か、及びこの学校の財政的裏付け如何という点である。一教官一教科を原則とし、場合によって一教官が二・三の教科を兼ね指導するという。慾を言えば、各科に助教や助手も必要である。殊に各教官は専門とする学と術とに長けているだけでなく、よく建学の趣旨を体認し、奉行の統制の下に、専門學術の指導と六弊打破の訓育を周到に実施しなければならない。このような理想的教官を各教科に整備し得ることは蓋し容易の事ではなかつたであらう。

また、この学校を經營するには、上述の教官の待遇費や校舎の建設、その施設乃至圖書の経費等々巨額の経費を要する筈である。然るに「迂言」にはこの点全く触れていない。教育財源に対する何等の考慮のない学校論は、所詮迂

儒の空論と評されても致し方あるまい。淡窓の「迂言」学制論の弱点の一つをここに見る。

教官の研究について、淡窓は注目すべき発言をしている。「一人ニテ一切ノコトニ通スルコト力及バザル所ナリ。強テコレヲスル時ハ其事未熟ニシテ用ヒガタシ」。「今時ノ学弊ハ科目ヲ分ツコトナキニヨリ、人ノ知リタルコトヲ知ラネバ恥トナル故ニ競ツテ同ジ道ヲ走ル（中略）。「儒者百人有リトモ一人ト同ジコトナリ」。専門分野の深究を要請する淡窓の見識は、当時の学者に対する警告だけでなく、今日の学界に対しても妥当するものと言つてよい。

次に生員（生徒）について考察しよう。この「学校ニ出テ学ブ所ノ生員ハ諸公子ヲ始メトシテ家老ヨリ歩卒迄ノ子弟、十歳ヨリ二十四歳マデ部屋栖ノ者不_レ残出席セシムベシ」とある。即ち入学資格者を士族に限り、庶民にはその鉄門を固く閉鎖している。この学校の性格上一応当然のことと言わねばならない。だが、石川謙先生の調査によれば平民をも入学を許可していた藩学が三十四校もある。（明治維新後の藩学では七十八校）（同博士著「我が国における児童觀の發達」、一五二頁以下）。藩学を、ひたむきに武士の子弟だけの教育場ときめこんでいた通念は訂正されねばならない。淡窓ほどの卓見者として尚且つ庶民子弟の入学を認め得る途を開いていなかったことを遺憾とする。

生徒の入学年齢について、藩学全体を見渡すと八歳及びその前後（A型）、十歳及びその前後（B型）、十五歳及びその前後（C型）という三つのタイプがある。A型は初等教育機関としての藩学、B型は中等教育機関に近い藩学、C型は完全な中等教育機関としての藩学の入学年齢と見るべきであろう。石川先生はこの三つの型を年代順的に処理し、合計百四十七藩の中でA型は天明、享和の頃から目覚ましく増加し、その傾向は年と共に顕著になっていること、B型は文化・文政の頃から次第に多くなること、明治維新以後になると百九十五の藩の中で、A型が八十七藩、B型が二十三藩、C型は十藩に過ぎないことを明らかにし、次のように結んでいられる。「かう見てくると学校が年と共に次第に年若い生徒を収容するようになった傾向を読み取ることができる」（前掲書一六五頁）。私はこの傾向は、藩

学がその教育内容を中等教育に限らないで、漸次に初等教育の内容をも含むようになったものと考ええる。

「迂言」に見る学制は正にB型である。漢籍の素読以前の初等教育は、家庭で或はその他寺子屋等で修め卒えた者を入学せしめたのであった。そこには初等教育の内容は見られない。これもこの学校の性格から一応肯かれることではある。しかし易の「童牛之牯ス」という語を援用して「幼少ノ中ヨリ早ク教フベシ」との主張からすれば、この学校にも初等教育の内容も加え、従って入学年齢をもつと若くする方が筋の通ったことになると思われる。

四 稽古の次第について

「迂言」の学制で、学習指導に助教法を活用したことに注目したい。助教法は、西洋においては第十九世紀の始め頃、イギリスのベル及びランカスターによって創唱された。この組織の特色は、上級生の中から優秀な者を選んで助教生 *monitor* として下級生を指導せしめたことにある。この方式で一層重要なことは、生徒を、助教が指導し得るように同一進度の小集団に組織し、教育内容を集団の進度に応じて系統的に整備配列したことである。

「迂言」の学制でも、輪読生または輪講生中の上等生を選抜して、素読生という同一進度の下級集団の指導に当らせた。同様に輪読生群は、輪講生または文章生中の上等生が助教となって指導されたのである。そして教官はこれら助教生を監督しながら、輪講生及び文章生を指導するのがその任務であった。

このような助教法は、教官による直接指導よりは幾分不徹底となることは免れ得ないであろう。が助教自身の学術を確実にするという利点も見逃せないであろう。それよりも、師弟一对一の非効率な個別教授に代って、ほぼ等質な学習集団を単位とする一斉学習方式を発展させる契機となった点、学級教育への道を開いたという点で、教育史学的に重要な意義を認めたい。

次に考查法について見るに、学業の査定に当り、当時他の藩学において規定されているような綿密さは欠けている

が単に学業の進度を検定するだけでなく、人物の評定に重点を置いている。咸宜園における月旦評と同様な発想として高く評価したいと考える。

(五) むすび

「燈下記聞」卷三（咸宜園四代の主、林外が淡窓の座談を毎夜燈火の下で筆記したもの）に有名な三奪之法なるものがある。入「我門」者有「三奪法」。一曰奪「其父所」附之年齒「置之於少者之下」。以「入門先後」為「長幼」。二曰奪「其師所」与之才学「与「不肖者」同」伍。以「課程多少」為「優劣」。三曰奪「其君所」与之階級「混」之於卑賤之中」。以「月旦高下」為「尊卑」。是三奪之法也。

これによれば入門の先後を以て長幼となし、課程の多少を以て優劣を定め、人物の高下を以て尊卑となすという頗る民主的な思想を看取することができる。「迂言」の学制では、ここまでは徹底していないが、私塾とは異り藩校としては、課程中心を堅持し、同一課程内では年齒を以て座を定め、かつ服色を以て身分を示したことは、当時の社会秩序確立上の限界であったことと思われる。

中島市三郎は、明治の学制と兵制を全く淡窓の発想に帰し、咸宜園の教育を以て教育の最高の典型とし、要するに淡窓を「教聖」にまで祭り上げている。私は、氏がライフ・ワークとして淡窓の研究に専念し、貴重な業績の多くを残されていることに敬意を表する。ただ、右のような勇敢な断言には直ちに賛意を表し得ない。淡窓の思想と業績を詳しく検討し、これに対する批判は、紙幅の関係で、ここでは許されない。「迂言」の各所に見られる儉約説や「迂言附録」に説く制度方能論等にも批判の余地が多い。これらすべて別の機会に譲ることにする。ともあれ、「迂言」全巻の主張は今日よりして幾多批判の余地はあるにせよ、当時の時点においては頗る進歩的な建策であったことを認めなければならぬと考える。

（昭和三七・九・二七・記之）

参考文献

淡窓全集、上中下三卷（本稿において「迂言」の引用文はすべてこの全集による）

小西重直著 広瀬淡窓

中島市三郎著 教聖広瀬淡窓の研究

同 広瀬淡窓咸宜園と日本文化

乙竹岩造著 日本教育史の研究 第一輯

角光嘯堂著 広瀬淡窓の思想と教育

宇都宮喜六著 淡窓広瀬先生